

田中先生のドゥルーズ研究

朝倉 友海

先生と職場を共にさせていただいたのは一年間のみであるため、自分に言えることはとても限られています。が、学生時代から先生のお仕事を仰ぎ見てきた一人として、ここで田中先生のドゥルーズ研究の重要性について述べさせていただきます。

二〇世紀哲学の中でも、ドゥルーズについては、その圧倒的な個性を前にして、なかなか客観的な視点からの学問的研究が進まないという状況が長らくありました。極端に言えば、影響を蒙りすぎて物真似に走るか、その理論を批判的に検討しようとして皮相的な見方に陥ってしまうかの、どちらかしか選択肢がないような時期が長くありました。世界的に見ても、近年まで模索状態が続いてきたと言えます。なるほど今日では、「ドゥルーズの思想を哲学的に重要なものとして客観的に論じる」という研究姿勢は、もはや当然のこととして受け止められていますが、この変化は決して自ずから生じてきたというわけではありません。

振り返って言うならば、そして日本の文脈で見ると、ドゥルーズに対する学問的な研究姿勢が定着するのに、先生による先駆的な研究実践が果たした役割はきわめて大きなものでした。日本のドゥルーズ研究の基礎となる土台は、私が見るかぎりでは、『外大論叢』に掲載された先生の一連の論考によって築かれたようなところがあります。とりわけ二つの「个体論」（「个体論 1：スピノザの个体様態観について」・「个体論 2：ドゥルーズの个体過程観について」、1989－2000 年）、「様々な他者：ドゥルーズの他者論をめぐって」（1999 年）、そして「ドゥルーズ哲学の地図」（2001 年）といった論考は、後の研究の発展のためにも非常に重要なものとなっています。

研究者目線と言えば、やはり所属教員の研究こそは大学のイメージを形作る最大の要素です。私にとって本学のイメージもまた、『外大論叢』に掲載された田中先生の画期的なご研究によって形作られたようなところがありました。赴任して知ったのは、近況では本誌になかなか投稿しない所属教員も多いということでしたが、本誌による研究成果の発信は、本学のイメージを高めるために

も重要だと、先生の業績を振り返って改めて思われます。

先生の長いご経歴の中では、本誌掲載のリストだけを見ても、多岐にわたる研究があります。ご自身の総括においても、ドゥルーズ研究はあくまでも「初期」に位置づけられるようです。最終講義では、その後の転回を振り返りつつ、当時（ドゥルーズ研究に集中されていた頃）は西洋と日本しか見ていなかったというような自己批判を、されていたことが印象的でした。私自身も、東アジアの哲学に強い関心を抱く一人として、フランス哲学から東アジアの思想文化へと転じていかれた先生の研究の軌跡を振り返ることで、世紀の移り替わりがもつ意味など様々なことを考えさせられます。

とはいえ、少なくとも私の目から見て大変強く思うのは、フランス哲学の一番いい時期にかの地に長く生活をされていたことが、一連の研究の背景にあるということです。例えば、映画館に行ったらドゥルーズがメモを取りながら映画を観ていたという目撃談を、あるとき先生からふと伺ったことがあります。このような何気ないことであっても、当然のことながら私たちは同じように経験することはできませんし、歴史的に見て貴重なことだと思います。

先述のように、ドゥルーズと距離をとって客観的に論じる姿勢が定着した今の状況だけを見るならば、研究上も大きな前進があったようにも見えます。しかし、そのようななかで私がしばしば感じるのは、同時代の環境を味わうことなく過去の思想に向かったところで、真にその思想に迫れるのだろうかというような素朴な疑問です。こういった観点からも、いい意味で時代が濃厚に反映されている先生の一連のドゥルーズ研究には、不朽の価値があると言えます。

先生が退職されることはたいへんに寂しいことですが、今後とも後進のご指導をいただければと願っております。